木と共に生きて

細田安治

■■22■■

マイスターとの出会い

昭和天皇が崩御され、街のネオン街も自粛し各地伝統のお祭りも順延、日本中が喪に服した1989年（平成元年）1月、東京木材企業を率いる安廣周治氏と大建工業貿易部次長渡辺孝之氏のお2人から、小正月休みを利用しフランス・パリの建築資材展と総合広葉樹メーカーのOBER社、イタリア北部のコモにある人工ツキ板TABU社など視察のお誘いがかかった。

この時期、ドイツ・バイニッヒ製モルダーの導入を検討していた。時あたかもバブル全盛期、本業の4営業所整備も一段落、次を模索していた時期であり「渡りに船」と誘いに乗った。

OBER社、フランス オーク宝の山

パリ東駅から急行で約2時間のアルベバルディデュ駅に到着、OBER社のギナー工場長の出迎えを受けた。製材からツキ板まで大きな会社だ。

世界中の広葉樹総合メーカーの共通点は、最上品はツキ板用、2番目は製材用、3番目は家具用の3つに大別している。これは誰でも考える共通点だ。

ヨーロッパの製材の木取りは、四つ割、耳をオトシてスライサー用の板子盤が出来上がる。柾目（クオーターカット）加工は、四つ割をそのままスライサーにかける。板目（クラウンカット）は四つ割をハーフロータリーで加工する。スライサーはイタリアクレモナ製だ。

大建工業はこの会社から、ヨーロッパでは売れない小幅のツキ板をフロア用として買い上げている。オトシがたまると、コンテナで出荷する契約になっていた。

ヨーロッパ訪問 ㊤

日本は、樹種、木目、寸法、木味、木の個性などから希少価値と、連続性を重視する考え方である。海外では木そのものを、希少価値として捉え、意匠性は二の次だ。「不揃いもの」こそが木の持てる価値としている。

したがって、シラタ、キズ、腐れ、割れ、節などは本物の木でなくては表現できないもの、数百年の風雪に耐えたからできた年輪の一部として捉えている。ビジネスとしてこのような単板を買っても、日本市場では通用しないので原木を買うことにした。

オーク神代丸太

そこで、ぶつかったのが、さきほどの腐れのコンセプトの違いだ。オークの原木のなかで木口からはっきり変色あり、ブラウンカラー、チョコレート色など強烈な個性がプンプンする丸太がある。長さ2500㍉、直径は450㍉ぐらいだったろうか。この丸太を前にして、買おうか買うまいか、迷いに迷い木口をチェーンソーで切り落としてもらった。

常識からいえば、腐れ丸太だ、こんなものは買うべきでないと思って迷っていると、工場長のギナードさんから「ブラウン色の家具専門に作っているイギリス人がこんな丸太で家具を作っている。頼まれてやっと探した丸太。無理に買わなくてもよい」などと言われた。日本で言う「神代物」といえる。

よし、挑戦してみようと決意し、内部が腐っていたら「運賃は払うが木代金は払わない」との約束で仕入れてきた。こんな、夢あり面白く冒険ありで結構楽しかった。この丸太はやっぱり腐って使いものにならず、運賃にプラスオンして決着した。

秘密商品 フランスオークの魁

オーク丸太を開発商品として大コンテナ1個分を仕入れたが、当時は現場が秘密商品として認知できず尻切れトンボに終わってしまった。フランスオークは、数年後に大阪の恩加島木材工業がやっと手を出し始めた。細田は数年先んじて開発するチャンスを逸した。

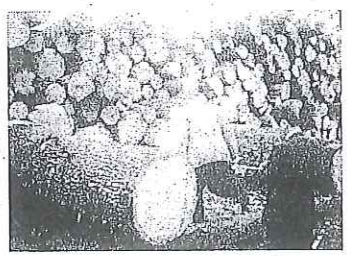
＝次回は6月4日付＝

（細田木材工業㈱会長）

ツキ板の思想

ツキ板はすべて0・5㍉の厚ツキが10枚ずつ裁断され紐で縛ってある。しかも必ずしも共木とは限らず、他の材が混入していることもある。木目主体でなく、あくまでも寸法本位で木材の無垢板と同じだ。この工場に限らずヨーロッパは全てこの方式だ。これなら、正確な寸検だ。しかし、このツキ板の市場は日本に育っていない。日本はあくまで盤一丁の寸検で取引している。

しかも、日本はあくまで装飾化粧用なのに対して、ヨーロッパ、アメリカでは、無垢板単板として見ている。意匠化粧に対する考えが違う。



OBER社フランスオーク丸太の宝の山